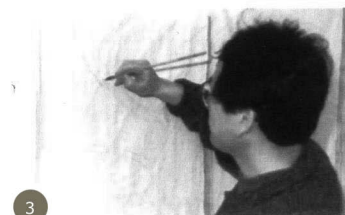




1 素材(布)を念頭において模様を構成してゆく。精密に描く場合とラフに描く場合があるが、用いる布のテクスチャーやボリュームに合わせて意匠する。



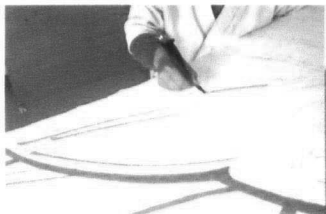
2 用いる色料に合わせて布調整を行う。天然染料、科学染料、等々使用する色料によって調整も異なる。



3 スケッチを元に青花を用いておおよその下絵を施す。この青花は後の「地入れ」の行程でほとんど消える。

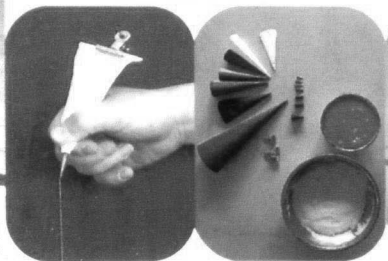


4 使用する生地、用いる染料、制作時期に合わせて防染糊を作る。材料はモチ粉、糠、塩、水を適量ずつ混ぜ、よく練りこんでから蒸す。塩加減と蒸し時間の調整が糊の良し悪しを決める。

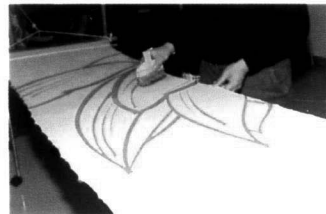
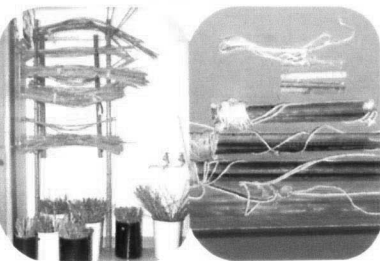


5 筒に糊を入れて、布に押し当てるようにして糊を置く。表が終わったら直ちに裏面にも糊を置き、よく乾燥させる。

## 筒と口金(くちがね)



## 伸子(しんし)

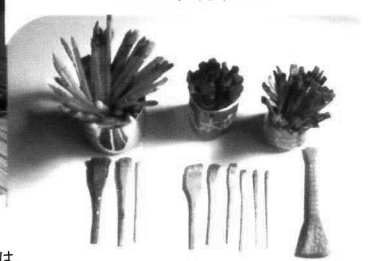


6 豆汁で「地入れ」を行う。この際、表裏とも刷毛で出来る限り均一に「引く」ように気をつける。



7 模様部分に様々な刷毛を使って色料を施す。「色指し」が終わったら、用いた染料によっては、色の定着の為に「中蒸し」を行う。

## 筆(小)



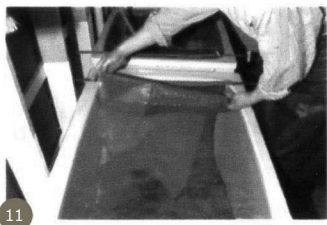
8 着色した模様の部分を「伏せ糊」でマスキングする。このとき早く乾くように「木挽き粉」や糠をまぶす。



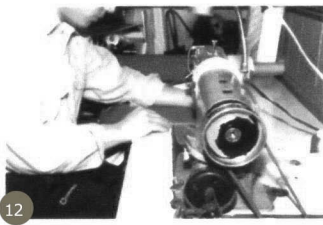
9 「伏せ糊」が乾いたら「地染め」を行う。化学染料、顔料を用いる時は通常、1~2回の引き染めで終わるが天然染料を用いる場合は3~30回の地染めを繰り返す事もあり、乾燥には天日を必要とするものや室内での乾燥をさせる物等、用いた染料によって異なる。



10 古色の再現や化学顔料を用いた場合などを除いて、染料(色料)の定着の為、「本蒸し」を行う。化学染料使用の場合はおおむね染めるとい作業の中では最も重要な行程となる。天然染料に於いては、色の定着と言うより染められたものをあらかじめ風化、退色させることで後々の色褪せを防ぐ役目もある。蒸し時間は使用している色料、素材によって異なる。



11 防染糊を落とす行程。しっかり染まってあれば流水は必要なく、水桶に水を張っておき、その中に2~6時間浸けておけば簡単に糊はおちる。次に中温湯に中性洗剤を加え、そのなかで十分に糊を落とし、よく水いをした後、自然乾燥させ、仕上げをする。



12 計画していた形に縫製・仕立てを行う。